冬支度　慌ただしくなる年の瀬を前に！

11月は「霜月（しもづき）」と言われるように、徐々に寒さが厳しくなっていきます。二十四節季の一つである「立冬（りっとう）」も、今月8日です。

冬支度も、この時期に行われるものが多いのではないでしょうか。例えば、雪の多い地域では、樹木を保護するための「雪吊り」が施されたり、融雪設備の点検などが行われたりして、やがて、年末に向けて年越しの準備が始まります。大掃除をはじめ、いわば一年の後始末に入る前に、私たちも仕事上の後始末の準備があるでしょう。

年初に立てた今年の目標を再確認することも、その一つで大切なことです。たとえ達成されなくても省みることで、次につながる発見があるかもしれません。また、一日のうちで10分でも、この一年お世話になった人をより具体的に思い出す時間を作ることで、感謝を深めることができるでしょう。

何かと慌ただしくなる年の瀬を前に、一年をていねいに総括することで、次につながる意義のある後始末をしていきたいものです。

紅葉狩り　紅葉を鑑賞する季節の行事

紅葉を鑑賞する習慣は、奈良時代から始まったと言われ、「万葉集」にも登場しています。平安時代の頃に貴族の間で広まり、紅葉を愛でながら宴を開いていたようで、その様子は「源氏物語」にも描かれています。その後、江戸時代には庶民も楽しむようになり、その後も秋の季節の行事として定着していきました。

紅葉を鑑賞するのに「紅葉狩り」と言うのはどうしてでしょうか。「狩る」とは、獣を捕まえるということですが、花や草木を探し求めるという意味もあるそうで、果物を採る場合にも使われます。「いちご狩り」や「ぶどう狩り」と言います。採集するわけでもなく、紅葉を鑑賞するのに「紅葉狩り」と言うのは、狩猟を好まない貴族が自然を鑑賞することを狩りに例えたと言われていますが、定かではありません。春の桜は「花見」と言い、桜狩りとは言いません。やはり狩猟のシーズンの秋だから「狩り」という言葉を用いたのでしょうか。また、元々は紅葉を集めて楽しんでいたのが、眺めることに変わっていったという説もあります。